

[国 語]

課題意識をもって書く学習の在り方についての一考察

— 気付きを生かし、必要な観点や優先度を判断しながら推敲する学習過程の工夫 —

佐藤 仁*

1 問題の所在

児童自身が「書く」ことの「課題意識・目的意識」をもって学習に取り組めるようにすることは重要なことである。「書く」ことの先にある目的が明確な中で、児童が意欲をもち文章を書き上げる姿をこれまでに何度も目にしてきた。しかし、「目的に向かって書くこと」が「相手に分かりやすく書くこと」という課題意識と直接結びつかない姿も多々見てきた。伝えたい気持ちもあり、学習したことを生かそうとする姿勢も見取れるが、実際は生かされていないことがある。このことは、書くためのゴールと言える単元全体を通した「目的意識」と、書くことの各過程における分かりやすく伝えるための技能を学ぶ「課題意識」とを区別した学習過程になっていなかったことが原因であると考えられる。そして、これまでの自分は学習の中でそのことを明確にした学習を構成できていなかったのではないかと振り返る。このことについて細川 (2019)¹⁾ も、書くことはそれぞれの学習過程で指導事項が位置付けられており、書くという行為は相手や目的があり、それに合わせて思考して書くことであると述べている。

また、「課題意識・目的意識」をもたせることについて、田中 (2019)²⁾ は、「学習者個々の実態をよく把握するとともに、「書く場」の設定に工夫を凝らし、児童自身が「課題意識・目的意識」を持って書くこと」とし、書くことの学習過程における「場の設定」や見通しづくりの重要性を説いている。そのような学習の書く際の技能に関する課題意識を明確にするために、田中 (2020)³⁾ は、モデル意見文を比較して、見つけたポイントをチェックシートに記述させる実践を行っている。学習の中で、比較からポイントを見付け、そのポイントを意識して書くことで、児童が教師の期待する観点を押さえて書く姿が述べられている。比較する中で児童の思考や気付きを促すことについて、桂 (2015)⁴⁾ は、教材に仕掛けを作り、考えたくなるような働きかけを行う重要性を説いている。また、古閑 (2018)⁵⁾ も、既有知による見方・考え方、児童間の見方・考え方のズレを顕在化し、そのズレを感知して問うた上で、共有可能性を問う学習材の必要性を説いている。しかし、田中 (2020)⁶⁾ の実践においては、指導から「書き方」を理解させられた反面、「内容」と結びつけた取り上げ方の不足を課題として挙げていることから、比較の仕方や内容への気付きを促す学習材の在り方を検討していく必要がある。

このような課題を踏まえつつ、「相手に分かるように書く」という、内容との関連を追求する課題意識を児童がもち、児童が主体的に思考したり書いたりしていくための場の設定と学習材の在り方に焦点を置き、書くことの学習の在り方を探ることとする。

2 研究の目的

小学校中学年の「新聞記事を書く」単元における学習過程を構成する中で、書く時に必要な視点を埋め込んだ比較可能な学習材を提示し、気付きを自分の記事に生かす判断の場を設定することが、課題意識をもって記事の内容を推敲する上で有効であることを、児童の変容を基に明らかにする。

3 研究の方法

(1) 相手に伝わる記事の内容を追求するための学習材の開発

新聞は、「記事」「見出し」「割り付け」「写真・図」など、多くの要素から構成されている。新学習指導要領の中学年の「書くこと」において、「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫するこ

*妙高市立斐太北小学校

と」⁷⁾とあることから、新聞を扱う中で「記事」を書く学習の重要性が見て取れる。そこで、本研究では、「事実と考えを分ける」「具体的な数値」「文末の統一」「段落のまとめり」「見出しが表す記事の主旨」等の相手に伝わることを意識した「記事」を書く際のポイントを埋め込んだ比較可能な学習材(図1)と、記事を象徴する「見出し」の工夫を考えるために「倒置」と「数値」を取り入れるよさを比較する学習材(図2)を提示する。そして、記事の内容を考える際のポイントへの気付きについては、抽出児童のワークシートへの記入を中心とした分析から検証する。さらに、学習時は、iPadのアプリである「ロイロノート」を用いて提示をしたり、書き込みを促したりしてICTを活用して進め

(A)

一日に出るゴミの量について

一日に三十三〜四十トンも出まされ、しよ理されてるそうです。アルミや貝がらは本当はもえないゴミなのですが、もえるゴミに出す。平成八年に四十億円かけて作られ、令和二十年まで使っていくそうです。古くなってきたので、きかいがこわれないように気を付けている。はたらいっている人はぜんぶで七人で、午前九時から午後七時までをやっています。こしようにそなえてしようきやくろは二つある。

(B)

紙ゴミや生ゴミがもえるのはいっしょん!!

クリーンセンターでは、一日三十三〜四十トンのゴミがしよ理されています。ゴミは、六百度のすなによつてもやされ生ゴミはいっしょんでえ、紙ゴミなら空気にもふれただけでもえしてしまいます。わたしは、ゴミをじつくりもやすと思っていたので、ゴミのほとんどがすぐにもえてしまうことを知り、おどろきました。でも、妙高のクリーンセンターは、できてから二十三年たち、古くなってきたので、きかいがこわれないように気を付けているそうです。わたしもゴミの分別をしつかりやりたいです。

図1 記事を書く際のポイントを埋め込んだ比較可能な学習材

沼津のひものは「日本一」
おいしさ最高 沼津のひもの

図2 見出しの学習材

ていく。

(2) 自己の記事を観点に沿って見直す場の設定の工夫

児童が課題意識をもって「相手に分かるように書く」には、自分の書いた文章に必要な観点を判断しながら客観的に捉える必要がある。そのことに関し、黒上(2013)⁸⁾は思考ツールを用いた書く過程の可視化と、そのことによる思考操作の必要性を説いている。そこで、児童自身が気付いたポイントと記事を見比べ、どの点について推敲の必要性があるかを思考操作した上で認識できるように、ポイントを可視化した思考ツール(図3)を用いて優先度を判断する思考操作を促す。そして、推敲前後の記事を比較し、推敲の場の工夫がどのように有効に働いたか(1)と同じ児童の変容を中心とした分析を通して検証する。

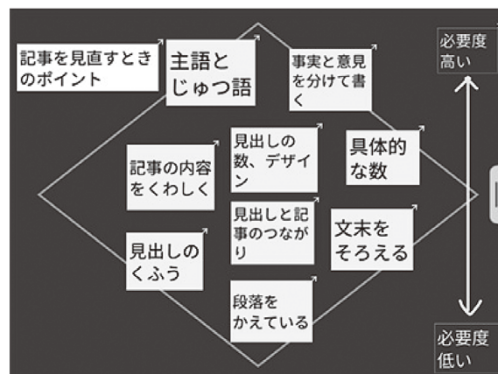


図3 推敲の優先度を視覚化する思考ツール

4 授業の概要

(1) 単元名 見学したことを新聞にまとめよう(学校図書4年上)

(2) 単元の目標

- 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方を理解し使うことができる。
- 相手や目的を意識して、書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすることができる。
- 書く内容の中心を明確にして、文章の構成を考えることができる。
- 進んで読み手を意識して書き方を工夫し、学習課題に沿って新聞にまとめようとする。

(3) 学習者 妙高市立H小学校 4学年13名

時間	○主な学習活動	・支援 ◇評価
1	○新聞を作ることに興味をもち、新聞の特徴について理解する。	・新聞を書くことを確認したり読んでもらう相手を設定したりして、新聞を書くための目的意識・相手意識を明確にする。
2	○情報を集めるための取材の進め方や資料の整理の仕方、記事の書き方を理解する。	・新聞の作り方に見通しをもって取り組めるように、作成の過程を押さえられるようにする。
3	○取材の計画を立て、取材を行うための練習を行う。 (ゴミ処理場見学：時間外)	・取材する内容や質問は社会の学習の中で考え、インタビューや質問の仕方の学習や練習を国語の時間に行えるようにする。

4	○書いた取材カードを分類し、記事カードに整理する。	・それぞれが記事カードを書き、記事の種類ごとに集めて分類することで、記事を書く際に取材してきたことを共有できるようにする。
5	○記事の配置や記事の大きさ、写真や表の大きさや位置を考え、割り付けをする。	・割り付けを行う中で伝えたい内容の順序性を明確にできるようにする。
6	○記事の下書きをする。	・記事に貼る写真を予め用意しておき、割り付けの際に写真の大きさに目安をもって取り組めるようにする。
7	○記事を比較して、よりよい記事の書き方について考え、見直す観点を理解する。	・「記事」を書く際のポイントの在り方に気付くための学習材や両方に活用できるポイントを埋め込んだ見出しを比較する学習材を提示し、比較して思考したり互いの考え方を聞き合ったりしてよりよい記事の書き方や見出しについて考えられるようにする。
8	○よりよい見出しの付け方について考え、理解する。	
9	○見直す観点と優先度を判断しながら、下書きを推敲する。	・思考ツールを用いて、個々の推敲を行う観点と優先度を明確にして見直しができるようにする。 ◇記事や見出しを見比べながら考え、よりよく記事を書ためのポイントや見出しの付け方に気付くことができ、それを基に自分の記事を書き直すことができる。
10～12	○記事を清書して、新聞を完成させる。(社会科としても作成する時間を確保)	・図や資料の貼付、デザイン等も考えながら作成を進められるように支援を行う。 ◇伝えたいことを明確にした新聞を作成することができる。
13	○新聞を読み合い、記事の分かりやすさの工夫などを伝え合う。	・書く際のポイントに沿って互いの新聞のよさを評価し合えるようにする。 ◇読んだ相手の新聞の工夫やよさをシートに書き、伝えることができる。

(4) 単元の指導計画

5 授業の実際と考察

(1) 相手に伝わる記事の内容を追求するための学習材の開発の有効性

単元の始めに新聞の形式や書き方についての学習を行った。そこで、「事実を書く」「伝えたいこと、人が知りたいことを書く」「知らない人が分かるように記事を詳しく書く」「事実と考えは段落を分けて書く」「分かりやすい見出しを付けたり、字の大きさや色を工夫する」「図や表、写真を入れる」等の内容と関連する書き方を確認した。その後、メモの例と記事の例を比較しながら、メモに書かれていることがどのように文章化されているか、詳しく書かれている部分はどこかを確かめた。その後、社会科での見学を行い、記事を種類ごとにカードにまとめ、割り付けを考え、記事の下書きを行った。最初の記事の下書きを終えた段階で推敲を行った。見出しが文章化されていたり、伝えたいことが絞られていなかったり、自分の考えが書かれていない等の実態が見られたが、児童の多くが書き上げたことに満足してしまっていた。そこで、一方は児童の実態に近い内容の記事、もう一方には気付いてほしいポイントを埋め込んだ記事を



図4 児童Rの記事の比較のワークシート

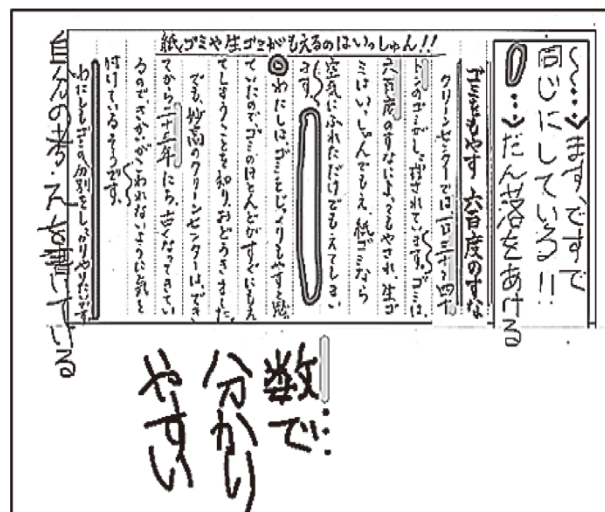


図5 児童Yの記事の比較のワークシート

比較する学習材（図1）を用いて、記事の内容について検討した。

すべての児童がBの記事を選び、その気付きをシートに記した。児童R（図4）は、「思ったことを書いている」として事実と考えの区別、見出しのレイアウトや数、「大事なことを押さえている」として伝えたいことを明確にして書くことの必要性に気付いている。また、児童Y（図5）は、児童Rと同様、事実と考えの区別への気付きの他に、「一日に三十トン～四十トン」等の具体的な数がいわれていることのが分かりやすさや、文末の統一や段落を変えることによる読みやすさに気付くことができた。他の児童にも同じような気付きが見られ、全体で気付きを共有したところ図6のようにまとめることができた。

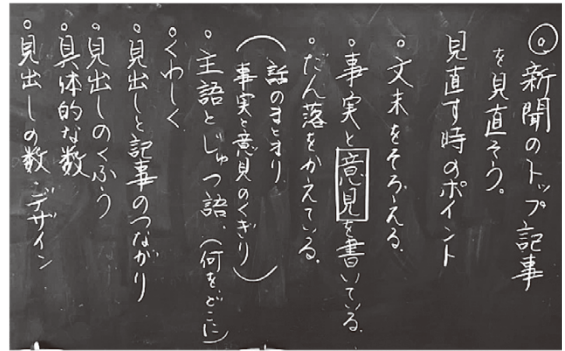


図6 記事を書く際のポイントの共有

ここで、見出しの工夫について、学習したものの実際にはどのような工夫をするとよいのかと悩む姿も見られた。そこで、見出しについても図2の学習材を提示し、見出しの在り方について考えた。『沼津のひものは「日本一」』を選んだ児童は9人で、児童Rのように「日本一」という数を用いたり具体性があったりするものがよいという考えが見られた。（図7）また、「日本一=すごい」というイメージがあるという考え、「日本一の中には作り方やおい

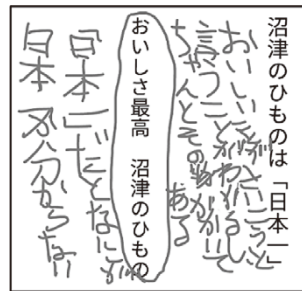


図7 児童Rの見出しの比較

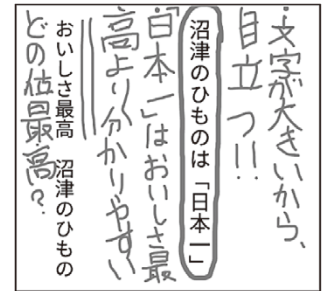


図8 児童Yの見出しの比較

しさも入っているから」という包括的な考えも意見として出された。それに対し、「おいしさ最高 沼津のひもの」を選んだ児童は4人であった。児童Yは、「最高」が示すことのが分かりやすいということから選び（図8）、他の児童は「言葉のリズムが良い」「終わりがすっきりしている」という意見が出された。見出しに関しては、意見を交流する中で、お互いの考えに納得する部分があり、「数値や具体性」「言葉のリズム」「倒置」を念頭に置きながら、内容との関連から読み手を引き付ける言葉を考える必要性を確認できた。

(2) 自己の記事に必要な観点や優先度を判断しながら推敲する場を設けたことによる記事の変容

記事の推敲を行う際に、図3の思考ツールを用いて、下書きの記事の自己分析を行った。自分にとって全体で共有したポイントのどの点ができている、どの点の推敲が必要かを、優先度の高い順に並べ替えて認識しやすくするためである。その中で児童Rは「段落を変えること、事実と意見を分けて書くこと、記事を詳しく書くこと」に焦点を当てて推敲を行うことを考えた。（図9）また、児童Yは、「事実と意見を分けて書くこと、段落を変えること、主語と述語を対応させること」に併せて、「具体的な数」や「見出しの工夫」に焦点を当てて推敲を行うことを考えた。（図10）そのことを基に下書きの推敲を行い、記事の清書を行った。

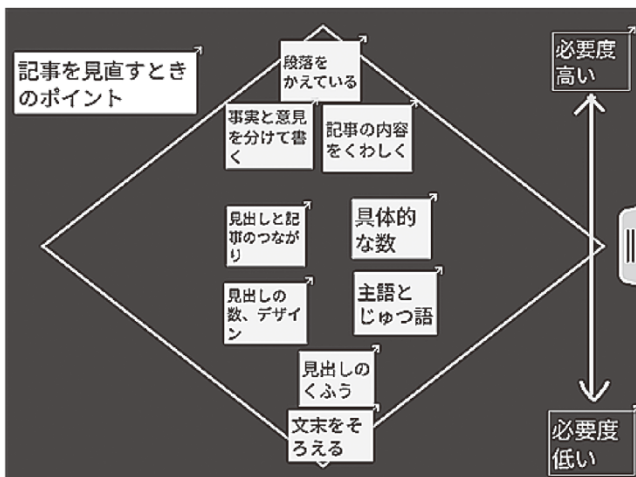


図9 児童Rの推敲のポイントの焦点化

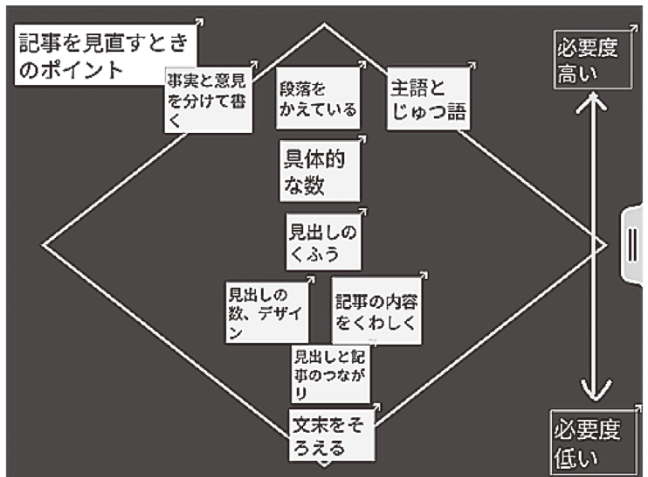


図10 児童Yの推敲のポイントの焦点化

児童Rは、下書きの段階では自分の意見を書いていなかったことに思考ツールを用いた自己分析を通して気付いた。そこで、推敲を行う中で事実と意見を分けて書き、段落を意識しながら自分の意見を取り入れた。また、ゴミの処理の工程を詳しく書いたり、ゴミの種類の違いによる工程の数の違いに具体性をもたせたりと、推敲の優先度を意識して書き直す様子が見取れた。(図11)

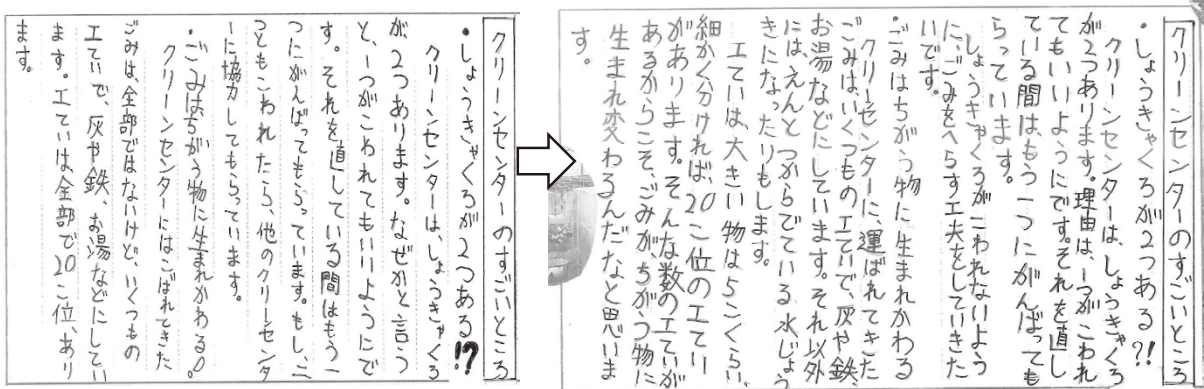


図11 児童Rの推敲前の記事と推敲後の記事

児童Yも、下書きの段階では自分の意見を書いていなかった。しかし、自分の意見を書くことの必要性があることを判断し、推敲を行う中で事実と意見を段落のまとまりで分けながら意見を書くことができています。さらに、もう一つの優先度が高いと判断した主語と述語の対応については、「○○は△△になり、○○は△△になり」というパターンで書いていたものを「○○は△△になります。」と一文を短くし、主語と述語の対応を明確にした書き方に改めている。また、見出しも書き換えている。「リサイクルに協力していきたい」という意見を書き加えたことで、記事の中心が「様々に行われているリサイクルを推進したい」であることが明確になった。そのことで、優先度が低くても課題意識が生まれ、見出しと記事のつながりを捉えながら見出しの工夫を意識して書き換えたものと考えられる。(図12)

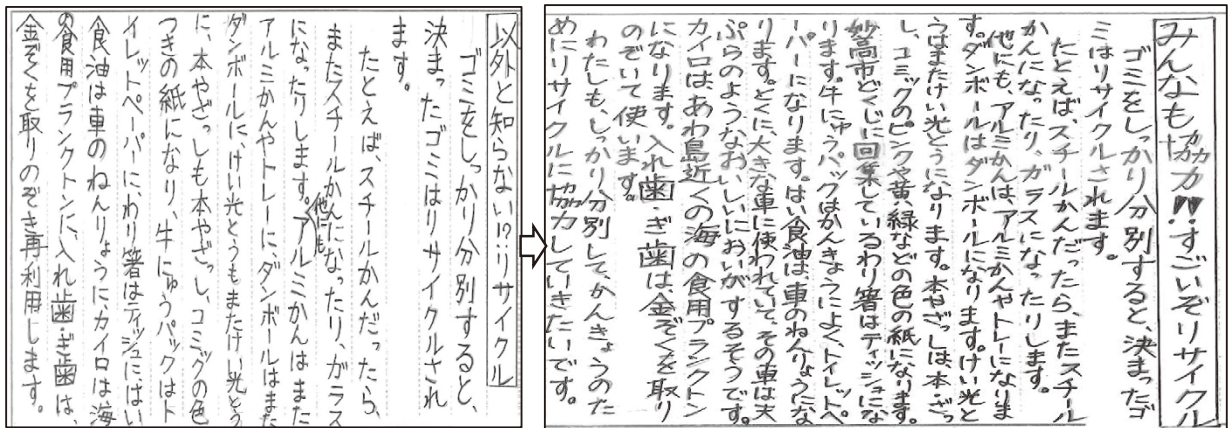


図12 児童Yの推敲前の記事と推敲後の記事

別の児童Mは、「見出しの工夫」を一番に、次いで「段落を変えること、事実と意見を分けて書くこと」に焦点を当てて推敲を行うことを考えた。その結果、意見の書き加えを、段落を意識して行うことができています。また、見出しの工夫について、「出るゴミの量」という見出しから「こんなに出るの!? ゴミの量」という自分の驚きを表しつつ、読み手を引き付ける表現に変えている。さらに、見出しの推敲で出るゴミの量に着目したことから、記事の内容もゴミが減る時期の内容が削除されて、ゴミの量が多い場面に絞って書いている。ここからも児童Yと同様に「見出しと記事のつながり」の推敲の必要性に気付き、他の推敲のポイントと関連した推敲を行う姿が見取れた。(図13, 14)

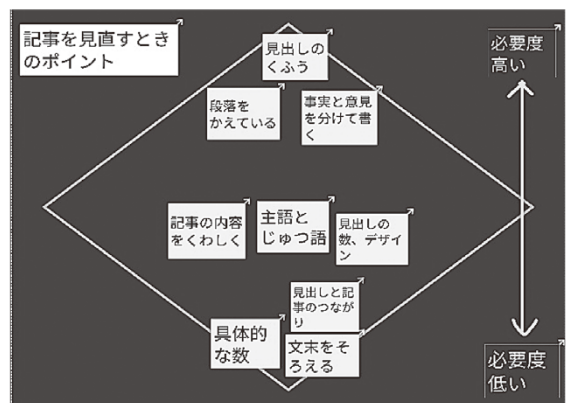


図13 児童Mの推敲のポイントの焦点化

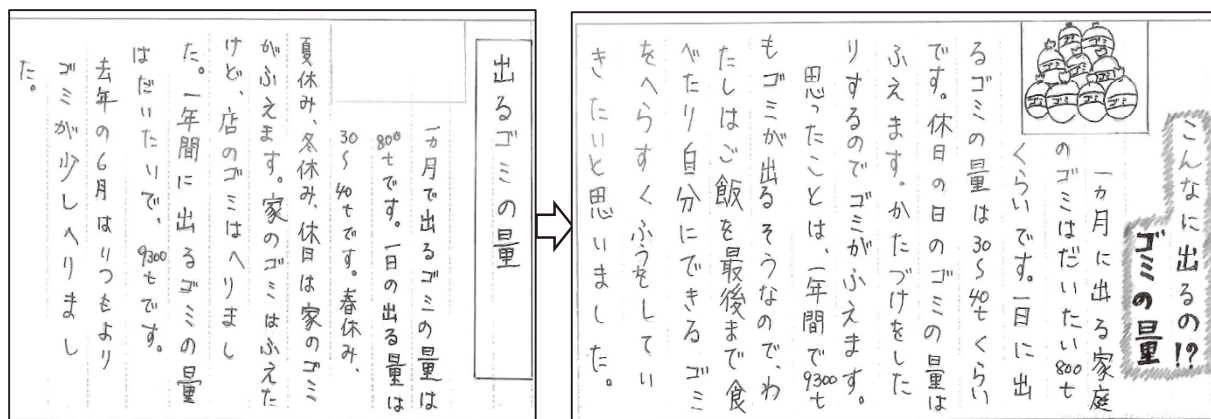


図14 児童Mの推敲前の記事と推敲後の記事

6 成果と課題

(1) 成果

本研究における成果は以下の3点である。

書く内容に関するポイントを意図的に埋め込んだ学習材を用いて比較する学習を行うことで、児童は書くことに必要な知識を自分たちで見付け出して取り入れようとする姿が見られた。内容に関しては、児童の書いたものに類似した文章と、教師が期待する文章という分かりやすい対比の学習材を用いて比較したことで、児童は「このように書きたい」という思いをもって活動に取り組むことができた。見出しに関しては、見出しの両方にそれぞれ工夫を埋め込むことで、どのように表現すると伝えたいことを効果的に表せるのか思考しながら比較することができた。

思考ツールを用いて自分の記事について観点や優先度を判断しながら推敲する場を設けたことで、児童は記事の内容をポイントに沿って客観的に見直すことができた。さらに、自分の記事に必要な推敲のポイントを焦点化できたことで、その部分を落とさないように意識しながら推敲することができた。また、あるポイントについて推敲する中で新たな課題意識が生まれ、優先度が低いとしたポイントも関連させて推敲を行っていく姿も見取れた。

研究の主目的ではないが、今回、比較したり、必要性や優先度を判断したりすることにICTを活用した。ICTの機能を用いることで、書いたり消したりする作業が行いやすかったり、思考ツールの操作がしやすかったりしたため、ICTの活用は児童が課題を解決していく過程に非常に有効な手立てとして働いた。

(2) 課題

今回は、出来上がった新聞を読み合う共有しか行わず、個人作業が中心となってしまった。思考ツールを用いて自身の記事に必要な観点や優先度を判断しながら推敲を行う場面で、他の児童と関わる場を設け、他者評価を取り入れることも可能であったと考える。そうすることで、より客観的に記事の内容に必要な観点を認識した推敲につなげられたのではないかと考える。

引用・参考文献

- 1) 細川太輔「書くこと」『新たな時代の学びを創る 小学校国語科教育研究』全国大学国語教育学会, 2019, 104~107 pp
- 2) 田中宏幸「課題意識・目的意識を持って書くー教科書教材の比較と活用ー」『月間国語教育 No562』日本国語教育学会, 2019, 4~9 pp
- 3) 田中行人「「意見文を書くポイント」への意識を高め、活用する児童を目指した意見文作文の指導の工夫ー「書く観点」に着眼したモデル意見文の比較検討を通してー」『教育実践研究 第30集』, 2020, 13~18 pp
- 4) 桂聖『教材に「しかけ」をつくる国語授業 10の方法 説明文アイデア50』, 東洋出版社, 2015
- 5) 古閑晶子「対話の重層性からデザインする国語単元学習」『対話のある国語科授業づくり』全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット⑨ 2018, 21~22 pp
- 6) 前掲書3)
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』東洋館出版社, 2017, 101 p
- 8) 黒上晴夫『「思考ツール」の授業』小学館 2013, 116~117 pp